

【！県内の病害虫に関する情報を配信中！】

鳥取県病害虫防除所ホームページにて病害虫予察情報を随時更新しています。  
各種情報は右のQRコードからご覧いただけます。



## 令和8年度病害虫発生予報第5号

令和8年7月8日  
鳥取県病害虫防除所

### 予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	葉いもち	平年並	平年並
		穂いもち	やや早い	平年並
		紋枯病	平年並	平年並
		縞葉枯病（ヒメトビウンカ）	—	少ない
		セジロウンカ	平年並	平年並
		斑点米カメムシ類	やや早い	やや多い
		フタオビコヤガ	平年並	やや少ない
果樹	ナシ	黒斑病	—	やや少ない
		黒星病	—	平年並
		輪紋病	平年並	平年並
		クワコナカイガラムシ	やや早い	平年並
		ハダニ類	やや早い	やや多い
	シンクイムシ類	やや早い	やや多い	
カキ	炭疽病	平年並	平年並	
	樹幹害虫 (ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ)	やや早い	やや多い	
ブドウ	べと病	—	平年並	
果樹共通	カメムシ類	平年並	やや多い	
野菜	ネギ	さび病	—	平年並
		黒斑病	—	やや多い
		白絹病	平年並	やや多い
		軟腐病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	—	平年並
		ネギアザミウマ	—	やや多い
	スイカ	つる枯病、炭疽病	—	やや少ない
		うどんこ病	—	やや多い
		褐色腐敗病、疫病	平年並	平年並
		アブラムシ類	—	平年並
		ハダニ類	—	平年並
	イチゴ	うどんこ病	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
アブラムシ類		—	平年並	
ハダニ類		—	平年並	
ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並	
	ハダニ類	平年並	平年並	



## 気象予報（抜粋）

1 か月予報（7月4日～8月3日：7月2日、広島地方气象台発表）

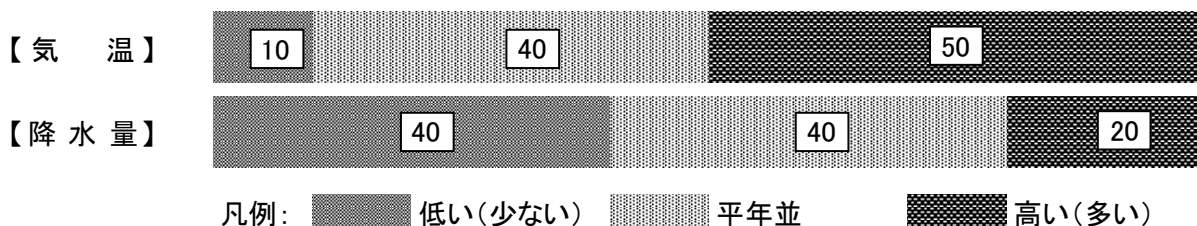
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

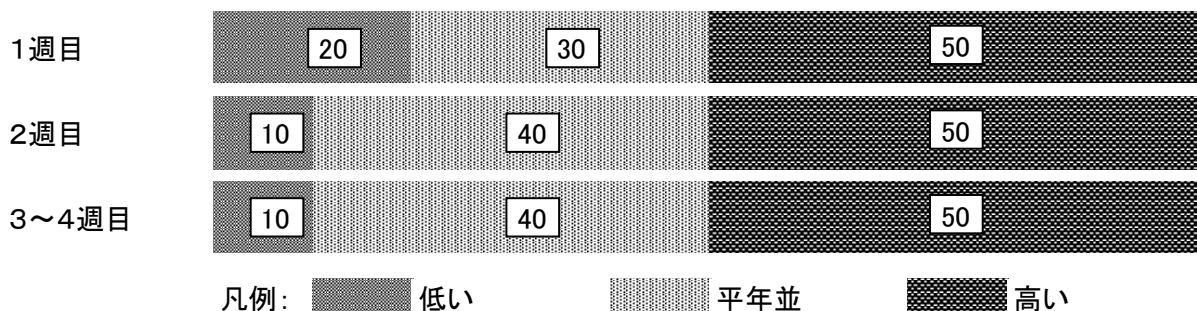
向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、高い確率50%です。

### <向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



### <気温経過の各階級の確率(%)>



## 普通作物

### [イネ]

#### 1 葉いもち

##### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月2日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の発生は、平年と同様に認められていない。

イ 7月2日現在、本病の広域発生は確認されていない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、期間の後半は平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 補植用置き苗は、本田における発生源となることが多いため、直ちに処分する。



- イ 長期効果持続型の育苗箱施用剤を使用している場合でも、十分な防除効果が得られない場合があるため、ほ場の観察を徹底し、本病の早期発見に努める。
- ウ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などの本病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では発生しやすい。上位葉に急性型病斑がみられた場合は、病害虫防除指針等を参考にして、直ちに治療効果のある粉剤、水和剤などにより防除を行う。
- エ 降雨が続く場合は雨の止み間に防除を行い、適期を失しないようにする（粉剤散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある）。
- カ 本田施用粒剤（オリゼメート粒剤等）を使用する場合は予防散布が基本であり、発生後では十分な効果が得られない。なお、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う。
- キ 鳥取県では、平成26年にストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の広域発生が一部の地域で認められ、平成27年以降、本系統薬剤の使用を中止していた。しかし、その後のモニタリング調査から、現地ほ場において耐性菌が生存している可能性は低いと考えられたため、令和5年から県内全域の一般ほ場において、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の使用を可能としている。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。

## 2 穂いもち

### (1) 予報の内容

発生地域	早期栽培地域及び早生品種栽培地域
発生時期	やや早い
発生量	平年並

### (2) 予報の根拠

- ア 6月29日現在、出穂期は平年より4日早いと予想されていることから、発生時期はやや早いと予想される。
- イ 穂いもちの伝染源となる葉いもちの発生は平年並と予想される。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、期間の後半は平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。向こう3か月の気象予報によると、8月は平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。葉いもちの予想発生量と気象予報から、穂いもちの発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 予防防除を基本とし、粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に防除を行う。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う。
- イ ほ場をよく観察して葉いもちの発生に注意し、本病の早期発見に努める。上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、水和剤などで葉いもちの防除を行う。

## 3 紋枯病

### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並



(2) 予報の根拠

- ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌核量は平年並であると予想される。
- イ 7月2日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の発生は平年並である。
- ウ 防除効果の高い育苗箱施用剤が普及している。
- エ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- 発生が多いほ場では、幼穂形成期から出穂直前までに1～2回の防除を行う。  
「コシヒカリ」では、出穂前15～20日の発病株率が25%、穂ばらみ期の発病株率が18%を防除の目安とする。特に、昨年の発生量が多かったほ場では、発生状況に十分注意する。

4 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

- ア 前年の縞葉枯病の発生は平年より少なかった。
- イ 前年のヒメトビウンカの発生はやや少なく、本種の越冬量はやや少ないと予想される。
- ウ 6月第6半旬現在、ヒメトビウンカの予察灯への誘殺は確認されていない。
- エ 長期効果持続型の育苗箱施用剤が広く普及している。
- オ これまでの経過及び向こう1か月の気象予報から、縞葉枯病及びヒメトビウンカの発生量は少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の多発地域において、ピメトロジン、フルピリミン、トリフルメゾピリム又はオキサゾスルフィルを含む育苗箱施用剤を使用していない場合は、病害虫防除指針等を参考にして、7月中旬～下旬頃に水和剤等で本虫の防除を行う。
- イ ヒメトビウンカはイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないよう注意する。

5 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月第6半旬現在、予察灯への誘殺は確認されていない。しかし、海外飛来性害虫飛来予測システムの解析結果から、6月中旬～7月初旬にかけて複数回の飛来があったと推測される。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 既に本県への飛来が確認されていることから、ほ場における生息密度に注意するとともに、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。
- イ 防除適期は、7月第6半旬～8月第1半旬になるものと予想される。発生が多い場合は、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、粒剤等で防除を行う。なお、この時期の要防除水準は10頭（生息成虫・幼虫数）／株である。



## 6 斑点米カメムシ類

### (1) 予報の内容

発生地域	早期栽培地域及び極早生品種栽培地域
発生時期	やや早い
発生量	やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 6月29日現在、出穂期は平年より4日早いと予想されていることから、発生時期はやや早いと予想される。

イ 6月第6半旬現在、予察灯へのアカスジカスミカメの総誘殺数は平年並である。

ウ 6月第6半旬現在、予察灯へのイネカメムシの誘殺は確認されていないものの、7月2日現在、昨年の多発地域では既に水田への成虫の飛来が認められている。また、昨年は、県内の広域でイネカメムシが確認され、多発ほ場や集中飛来ほ場が県内各地に点在していた。

エ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと見込まれる。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ 等

(ア) イネの出穂20日前頃及び出穂期にイネ科雑草の草刈りを行って、カメムシ類の発生源を少なくする。草刈りは地域一斉に行うと効果が高い。ただし、イネの出穂期以降に、穂を付けたイネ科雑草の草刈りを行うと、穂で増殖したカメムシ類を水田に追い込むことになるので、イネ科雑草が穂を付ける前に出穂期の草刈りを行う。

(イ) 周辺雑草地にカメムシ類の発生が多いほ場では、穂揃い期～乳熟初期に、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、水和剤等を散布する。

(ウ) 粒剤を使用する場合は、病害虫防除指針等を参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。また、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤等で追加防除を行う。

### イ イネカメムシ

(ア) 昨年、イネカメムシによる被害が多かった地域では、越冬後の成虫が多いことも予想されるので、ほ場での発生状況には十分注意する。

(イ) イネカメムシは、他の斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシなど）と異なり、イネ科雑草地に生息する個体は少ないため、雑草管理では密度を低減できない。

(ウ) イネカメムシの発生量が多いほ場では、出穂期～出穂直後、穂揃い期～乳熟初期（1回目の7～10日後）の2回防除を基本とする。

## 7 フタオビコヤガ

### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

### (2) 予報の根拠

ア これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、第2～4世代幼虫の発生



時期は平年並の7月第2半旬～8月上旬と予想される。

イ 6月第5半旬現在、本種のフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種に対して効果が高い育苗箱施用剤（スピノサド剤、スピネトラム剤、ジアミド系の殺虫成分を含む育苗箱施用剤）を使用していないほ場では、7月第3半旬頃より幼虫の食害が増加し始めると予想される。

イ 7月中旬以降、穂ばらみ期防除の1週間前までに要防除水準（暫定版：下記の①～③の条件をすべて満たす場合、①発生がの主体が1.2cm以上の幼虫、②被害株率90%以上、③食害葉面積率10～20%以上）に達した場合は、病害虫防除指針などを参考にして、直ちに粉剤、水和剤などで防除を行う。

上記の時期に要防除水準に達していない場合は、穂ばらみ期に、粉剤、水和剤などを散布する。

## 果 樹

### [ナ シ]

#### 1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月中下旬の現地ほ場における巡回調査の結果、新梢葉及び果実の発生量は平年に比べてやや少なかった。

イ 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）における新梢葉の発生量は平年に比べて少ない。

ウ 中国地方の梅雨入り（速報値）は6月4日頃（平年：6月6日頃）と平年並である。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年に比べてやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 降雨により新梢葉の発病が増加するので、新梢葉の発病が多い園では追加防除を検討する。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブル1，500倍液、アリエッティC水和剤800倍などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

エ 散布に当たっては、薬液が新梢の先端まで十分かかるように丁寧に散布する。

#### 2 黒星病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月中旬～7月上旬の現地ほ場における巡回調査の結果、果そう葉における発生量は平年に比べてやや少なく、果実における発生量は平年に比べてやや多かった。

イ 中国地方の梅雨入り（速報値）は6月4日頃（平年：6月6日頃）と平年並である。



ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や果実は伝染源となるため、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に薬剤散布を行う。

ウ 薬剤は、かけむらがないように丁寧に散布する。

エ 薬剤は、キャプレート水和剤600倍液、ベルコートフロアブル1, 500倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であり、伝染源のいぼ皮病斑の密度も平年並と見込まれる。

イ 中国地方の梅雨入り(速報値)は6月4日頃(平年:6月6日頃)と平年並である。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の被害は果実袋で予防できるが、袋掛けが遅くなると発病が増加するので早めの袋掛けを心がける。

イ 枝における発病を防ぐため、枝にも薬液がかかるよう注意する。

ウ 薬剤は、キャプレート水和剤600倍液、ベルコートフロアブル1, 500倍液、アリエッティC水和剤800倍液などを使用する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クワコナカイガラムシ越冬世代のふ化開始はほぼ平年並の4月28日(平年:4月29日)、ふ化最盛期はほぼ平年並の5月4日(平年:5月5日)であった。

イ 昨年の本種による果実被害量は平年並であり、越冬世代の発生量も平年並と見込まれる。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年に比べてやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤はダイアジノン水和剤34の1, 000倍液、ジノテフラン水溶剤(アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤)2, 000倍液などを使用し、連用を避けて輪番散布する。

イ 薬剤の散布に当たっては、カイガラムシ類が集合する枝葉の他、枝の切り口、粗皮などにも十分にかかるようにする。



## 5 ハダニ類

### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い  
発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるカンザワハダニの10葉当たりの寄生個体数は、1.4頭（平年：0.6頭）と平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ハダニ類の発生に好適な条件になると予想され、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤の効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ 薬剤は、コロマイト乳剤1,500倍液、スターマイトフロアブル2,000倍液、ダニコングフロアブル2,000倍液、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。

## 6 シンクイムシ類

### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い  
発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地9地点のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の発生時期は平年に比べてやや早く、発生量は平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3回成虫の発生最盛期は平年に比べてやや早い7月中旬頃、モモシンクイガ第2回成虫の発生最盛期は平年に比べてやや早い8月上旬頃で、発生量は平年に比べてやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 薬剤はモスピラン顆粒水溶剤4,000倍液、ダイアジノン水和剤34の1,000倍液、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液、オリオン水和剤40の1,000倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

## [カ キ]

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年に比べてやや多く、越冬伝染源量もやや多いと見込まれる。



イ 中国地方の梅雨入り（速報値）は6月4日頃（平年：6月6日頃）と平年並である。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病原菌は、緑色のやわらかい新梢に感染しやすい。

イ 7月上中旬に徒長枝を中心に園を見回り、発病が認められた枝は必ず切除して、園外に持ち出す。

ウ 薬剤は、7月上～中旬にマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤）600倍液などを使用する。

2 樹幹害虫（ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ）

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 昨年の樹幹害虫の被害量は平年に比べてやや多く、越冬量も平年に比べてやや多いと予想される。

イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年に比べてやや早く、発生量は平年に比べてやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除は幼虫の食入防止を目的に、春の1回目処理から2～3か月後の7月を目安に処理を行う。

イ 薬剤はガットサイドSの1.5倍液を樹幹害虫の被害が多い部位（樹幹部や枝基部）を中心に散布又は塗布する。なお、ガットサイドSの使用基準は、使用時期が産卵期～幼虫喰入初期、但し収穫45日前までであるため、特に早生品種では使用時期に注意する。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）では、本病の発生は認められていない。

イ 中国地方の梅雨入り（速報値）は6月4日頃（平年：6月6日頃）と平年並である。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所や多かん水園での発生が多い。

イ 発病した葉や果実は伝染源となるため、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分する。

ウ 薬剤の散布は、園の周辺部や枝葉が混み合ったところなどにかけてむらがないように丁寧に散布する。特にハウス栽培では、谷間やビニールのつなぎ目の、雨水

【！県内の病害虫に関する情報を配信中！】

鳥取県病害虫防除所ホームページにて病害虫予察情報を随時更新しています。  
各種情報は右のQRコードからご覧いただけます。



の流れ込む部位に発病が多いことから防除の際はこの部分の防除を徹底する。

エ 薬剤はホライズンドライフロアブル2，500倍液、ムッシュボルドーDFの500倍とクレフノン100倍の混用液、レーバスフロアブル2，000倍液などを使用し、散布にあたっては果実の果粉溶脱に注意する。

## 〔果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）〕

### 1 カメムシ類

#### （1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

#### （2）予報の根拠

ア 6月下旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は、平年並～平年に比べてやや多い。

イ 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）において、カメムシ類の果実被害は確認されていない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、果樹園への飛来時期は平年並の7月中旬～8月上旬頃、発生量は平年に比べてやや多いと予想される。

#### （3）防除上注意すべき事項

ア 例年、第1世代成虫が発生する7月中旬～8月上旬頃が果樹園への飛来量が増加する時期なので、定期的にはほ場を見回り、カメムシ類の飛来に注意する。ただし、多発生年の場合、7月上旬頃から果樹園への飛来量が増加した事例がある。

イ カメムシ類の飛来が認められた場合は、ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ及びモモを対象としてジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）2，000倍液、ナシ、カキ及びモモを対象としてアグロスリン水和剤2，000倍液などを散布する。

## 野 菜

### 〔ネギ〕

### 1 さび病

#### （1）予報の内容

発生量 平年並

#### （2）予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量はやや多い。

イ 本病は気温が24℃以上では発生が抑制される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### （3）防除上注意すべき事項

薬剤は、オンリーワンフロアブル1，000倍液、ラリー乳剤4，000倍液などを使用する。発病後は、オンリーワンフロアブルにカリグリーンを800倍で混用して散布するか、アミスター20フロアブル2，000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3，000倍液、カナメフロアブル4，000～8，000倍液、カーニバル水和剤1，000倍液などを散布する。



## 2 黒斑病

### (1) 予報の内容

発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量はやや多い。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液などを用いて予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000～1,500倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3,000倍液、シグナムWDG1,500倍液などを散布する。

## 3 白絹病

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生量はやや多い。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともにやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 7月上旬の土寄せ時に、モンカット粒剤10a当たり4～6kg、モンガリット粒剤10a当たり4～6kgなどを株元散布する。

イ 7月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液、カナメフロアブル4,000～8,000倍液などを株元散布する。

## 4 軟腐病

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷が付くような無理な土寄せや追肥を行うと発病が助長されるので避ける。

イ 植付後2か月以上経過し、収穫まで1か月以上を要するものには、7月上旬の土寄せ時に、オリゼメート粒剤10a当たり6kgを株元に散布する。

ウ 最終土寄せ前後にZボルドー500倍液、ヨネポン水和剤500倍液、クプロシールド1,000～1,500倍液などを7～10日間隔で2～3回散布する。



## 5 ネギハモグリバエ

### (1) 予報の内容

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、ファインセーブフロアブル2,000倍液、グレーシア乳剤2,000～3,000倍液、ヨーバルフロアブル2,500～5,000倍液などを散布する。

## 6 ネギアザミウマ

### (1) 予報の内容

発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ハチハチ乳剤1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤2,500～5,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、ファインセーブフロアブル1,000～2,000倍液、グレーシア乳剤2,000～3,000倍液、トクチオン乳剤1,000倍液などを用いて、7～10日間隔で散布する。

## [スイカ]

## 1 つる枯病、炭疽病

### (1) 予報の内容

発生量 やや少ない

### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ つる枯病及び炭疽病は、降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア トンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。

イ 本病は、株元や雨滴のあたる箇所から発病しやすいので、薬剤散布は株元にも薬剤が付着するように丁寧に行う。

ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨の止み間に防除する。

エ 薬剤は、ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の700倍液などを用いて予防散布する。発病後は、アミスター20フロアブル2,000倍液、シグナムWDG1,500～2,000倍液などを散布する。

## 2 うどんこ病

### (1) 予報の内容

発生量 やや多い



(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生量はやや多い。

イ 本病は、25℃前後の気温と乾燥条件で発病が増加する。また、曇天が続くと発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期のほ場では、カリグリーン800倍液、ショウチノスケフロアブル2,000倍液などを散布する。つる枯病が同時に発生している場合には、ベルクト水和剤1,000倍液を散布する。

3 褐色腐敗病、疫病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 褐色腐敗病及び疫病は多雨によって発生が増加し、一度発生すると、急速に広がる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場の排水を良好にする。特に豪雨時には滞水のないように対策を講じる。

イ 毎年、疫病の発生するほ場では、ジマンダイセン水和剤400～600倍液を予防散布する。

ウ 褐色腐敗病の発生ほ場ではリドミルゴールドMZ1,000倍液、ホライズンドライフフロアブル2,500倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、コルト顆粒水和剤4,000倍液、ハチハチフロアブル1,000倍液などを使用する。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、マイトコーネフロアブル1,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを使用する。



## [イチゴ]

### 1 うどんこ病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場（育苗床）において、本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、25℃前後の気温と乾燥条件で発病が増加する。また、曇天が続くと発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 本ぽに病原菌を持ち込まないために、育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては葉裏にも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。発病初期までの薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、サンヨール500～1,000倍液、フルピカフロアブル2,000～3,000倍液などを使用する。

ウ 発病後は、トリフミン水和剤3,000～5,000倍液、モレスタン水和剤3,000～4,000倍液などを散布する。

### 2 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場（育苗床）において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗時、頭上かん水は発生を助長するため底面給水を行う。

イ 育苗期間中、罹病性品種については、下記の薬剤を定期的に散布する。なお、薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、及びランナーにも薬液がムラなくかかるように丁寧に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。

ウ 育苗初期は、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルは薬害が発生しやすいため、展着剤を加用しない。

エ その後の散布薬剤は、ベルコートフロアブル1,000倍液、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを用いて、7～10日間隔で予防散布する。

### 3 アブラムシ類

#### (1) 予報の内容

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地のイチゴ育苗床における本種の発生量は平年並である。



イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、チェス顆粒水和剤5,000倍液、ベストガード水溶剤2,000倍液などを使用する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地のイチゴ育苗床における本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からサンヨール500倍液、アーデント水和剤1,000倍液などを散布する。発生量が多い場合はコロマイト水和剤2,000倍液、グレースシア乳剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブル1,000倍液、ダコニール1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを使用し、予防散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における本種の発生は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生量が増加する。茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。

イ 防除薬剤は、カンザワハダニ対象に、コテツフロアブル2,000倍液、ハダニ類対象にコロマイト乳剤1,000倍液などを使用する。

【！県内の病害虫に関する情報を配信中！】

鳥取県病害虫防除所ホームページにて病害虫予察情報を随時更新しています。  
各種情報は右のQRコードからご覧いただけます。



[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、農林水産省の「農薬登録情報提供システム」から検索で  
きます (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導などに際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病害虫防除所ホームページ>

アドレス <https://www.pref.tottori.lg.jp/boujosyo/>



病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類など）な  
どの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用くだ  
さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係

〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病害虫防除所

（電話：0857-53-1345、電子メール：byogaichu@pref.tottori.lg.jp）

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

（電話：0857-53-0721、ファクシミリ：0857-53-0723）

果樹・野菜関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

（電話：0858-37-4211、ファクシミリ：0858-37-4822）

※次回、予報第6号の発表は8月5日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。

「熱中症を防ぎましょう」

「野焼きの延焼による山林火災に注意しましょう」

「危ない！耕うん機はぼちぼち運転で」

「農作業中のダニ刺咬に注意！」

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課ホームページ  
農業機械・農作業安全

<https://www.pref.tottori.lg.jp/119790.htm>



<連絡先>

〒680-8570 鳥取市東町 1-220

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課農業普及推進室

（電話：0857-26-7327、FAX：0857-26-7294）